SHOW-HEY シネマルーム

★★★★★

キングダム 大将軍の帰還

2024 年／日本映画
配給：東宝、ソニー・ピクチャーズエンタテインメント／145 分

2024（令和 6）年 7 月 13 日鑑賞	TOHO シネマズ梅田

Data　２０２４－５２

監督：佐藤信介
脚本：黒岩勉／原泰久
原作：『キングダム』
出演：山﨑賢人／吉沢亮／橋本環奈／清野菜名／山田裕貴／岡山天音／三浦貴大／新木優子／吉川晃司／髙嶋政宏／要潤／加藤雅也／高橋光臣／平山祐介／山本耕史／草刈正雄／長澤まさみ／玉木宏／佐藤浩市／小栗旬／大沢たかお

みどころ

「潜水艦モノは面白い」。それが私の“持論”だが、それと同じように「三国志モノは面白い」や、「始皇帝（嬴政／えいせい）モノは面白い」も私の持論だ。しかして、原泰久原作のコミック『キングダム』（全 70 巻・継続中）を映画化したシリーズ第 4 作（＝完結作）のテーマは？面白さは？

原泰久の原作の面白さは、「始皇帝モノ」本来の、若き日の嬴政だけを主人公とせず、“名もなき若者、信”を第 1 の主人公とし、“大将軍、王騎”を第 2 の主人公にしたことだ。これにより、史実性とフィクション性が程よくブレンドされたため、私のような歴史ファンだけでなく歴史に興味のないエンタメ志向の若者をも取り込むことに大成功！

したがって、信が王騎に憧れて大将軍になることを夢見る物語がフィクションなら、飛信隊の大活躍もすべてフィクションだ。他方、第 2 作の「蛇甘平原の戦い」も、第 3 作と本作の「馬陽の戦い」も史実に即したもの。また、趙軍の総大将龐煖や軍師李牧の物語も史実だ。さあ、「関ヶ原の戦い」（1600 年）と対比すればより興味深い、「馬陽の戦い」2 日間の全貌とは？

秦と趙のどちらが勝ったの？そして「大将軍の帰還」とは一体ナニ？本作公開と同時に TV 放映された過去 3 作や、現在 BS11 で放映中の中国歴史ドラマ『始皇帝 天下統一』（20 年）（全 78 話）と対比しながら、本作をじっくり堪能したい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■シリーズ第４章（＝最終章）は必見！■□■

『三国志』大好き人間の私にとって、中国 TV ドラマの各種『三国志』関連作品は必見！その代表が①美人女優・孫儷(スン・リー)主演の『ミーユエ 王朝を照らす月』（原題：芈月

伝）（15 年）（全 81 話）や、②張魯一（チャン・ルーイー）が嬴政（えいせい）（＝始皇帝）役を演じた『始皇帝 天下統一』（20 年）（全 78 話）。また面白いのが③『キングダム～戦国の七雄』（原題：风云战国之列国）（19 年）（7 回シリーズ）、④『三国志 司馬懿 軍師連盟』（17 年）（全 86 話）、⑤『鬼谷子 ―聖なる謀―』（16 年）（全 52 話）等々だ。

他方、原泰久の原作を映画化した、日本発の『三国志』たる『キングダム』シリーズも必見！同原作は既刊 70 巻という膨大なものだから、それを映画化するについては、どんな切り口でどの部分を取り上げ、1 作ごとの見どころをどこに設定するかが難しい。したがって、その脚本を書いたり、監督・演出をするのは大変だ。しかして、本シリーズは、第 1 作『キングダム』（19 年）（『シネマ 43』274 頁）が 2019 年に公開された後は、第 2 作『キングダム 2 遥かなる大地へ』（22 年）（『シネマ 51』158 頁）、第 3 作『キングダム 運命の炎』（23 年）（『シネマ 53』217 頁）に続いて、第 4 作『キングダム 大将軍の帰還』（最終章）まで、1 年に 1 作ペースで進められたからすごいものだ。同シリーズの核となる 3 人の主人公は、①名もなき若者、信（しん）（山﨑賢人）、②中華統一を目指す若き大王、嬴政（えいせい）（吉沢亮）、そして③信が憧れる秦の大将軍でストーリー構成の核となる将軍王騎（おうき）（大沢たかお）だが、それ以外にも登場人物は多い上、濃いキャラの強者ばかりだから面白い。

シリーズ第 3 作は、前半の「“紫夏”編」と後半の「馬陽の戦い」にバランスよく大別されていたが、『大将軍の帰還』とサブタイトルされた第 4 作（最終章）のテーマはナニ？私はそれを注視していたが、それは前作に続いて「馬陽の戦い」だったから意外だ。これは趙と秦との戦いだが、佐藤信介監督は、なぜそれに固執するの？「キングダム」シリーズの第 4 作なら、もっと別の面白いテーマがあるのでは？そんな疑問もあったが、ストーリー中盤に「“摎（きょう）”（新木優子）編」を挿入して、大将軍龐煖（ほうけん）（吉川晃司）と大将軍王騎との因縁の戦いを大きく盛り上げるネタとして活用し、「龐煖 vs 王騎」の一騎打ちに注目させながら、再び「馬陽の戦い」の詳細とその意義を描き、最後に「大将軍の帰還」で盛り上げるという手法には、なるほど、なるほどと大きく納得。

■□■趙の総大将は趙壮！しかし、影の総大将は龐煖！■□■

私は第 3 作の評論を、＜戦国七雄形成図は？合従連衡策とは？＞、＜趙が侵攻！その数は？総大将は？VS 秦の大将軍は？＞、＜政が中華統一を目指すのは紫夏との約束を果たすため！＞、＜馬陽の戦いの布陣は？戦いはどこから？飛信隊の役割は＞、＜シリーズ第 4 作は如何に？その期待は高まるばかり！＞の小見出しに分けて詳細に書いた。燕、斎、魏、趙、楚、韓、秦という「戦国の七雄」の中で、密林と草原の地である南方に最大の領土を誇った「楚」や、河北・山西・陝西にまたがり北は遊牧民族地域に隣接した「趙」ではなく、最西端に位置し現在の陝西省付近を中心に発展し、中原諸国からは蛮夷の国とさげすまれていた「秦」が、なぜ戦国の七雄の覇者となり、中華統一を成し遂げたの？

それについて最も明確な答えを出してくれる上に、めちゃ面白いドラマが『キングダム～戦国の七雄』（7 回シリーズ）だ。同作は 1 国 1 話で各国の興亡を描くことにより、その謎に迫ったミニシリーズで、短いながら重厚な本格歴史ドラマに仕上がっている。同作を

紹介した「『中国時代劇ドラマガイド 2021』69 頁」では、趙について「長平の戦いで秦の白起に大敗。最後の名将・李牧も、王に疑われて死罪となり、趙は滅亡した。」と紹介している。ちなみに、趙が「長平の戦い」で秦の白起に大敗する姿は『ミーユエ 王朝を照らす月』でも詳しく描かれていた。

そんな「長平の戦い」の恨みを晴らすべく、現在 15 万の大軍を率いて秦への侵攻を目指し「馬陽の戦い」で布陣している趙軍の総大将は趙壮だが、実は彼は龐煖に代わって指揮を取っているらしい。そこで問題は、龐煖はなぜ総大将としてこの場にいないの？ということだが、本作ではその秘密が徐々に明かされていくので、その展開に注目！ちなみに、趙の総大将龐煖や大将軍趙壮は『キングダム～戦国の七雄』の中にも登場するので、本作とその TV ドラマを対比すれば、より興味が増すことを疑いなしだ。

■□■趙壮のバックには李牧も！総大将 vs 大将軍 vs 軍師■□■

王騎は秦の大将軍だが、戦国七雄の各国にはそれぞれ大将軍と呼ばれる強者がいた。趙における“三大天”は廉頗、藺相如、趙奢だが、今、武将だけでなく軍師としてその才能を発揮しているのが李牧（小栗旬）だ。しかして、趙は、今李牧の登場を待っていたらしい。“軍師”といえば、日本では NHK 映画ドラマ『軍師官兵衛』の主人公たる黒田官兵衛が有名だ。豊臣秀吉が最初に招いた軍師は竹中半兵衛だが、途中から黒田官兵衛が加わり、竹中半兵衛の死亡後は、黒田官兵衛がその役割を一手に担った。「本能寺の変」による信長死亡後の「中国大返し」は黒田官兵衛の策だし、関ヶ原の合戦後、徳川家康が最も恐れた男が九州の豊前国主になった黒田官兵衛だった。

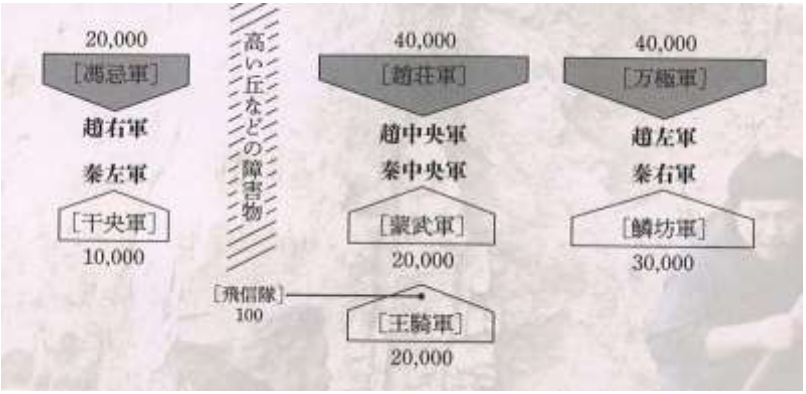
他方、「三国志」で最も有名な軍師は諸葛孔明。義兄弟の契りを結んだ玄徳、関羽、張飛の 3 人を助け、「三国鼎立」の案を立てたのが彼だ。また曹操に仕えた後、魏王に即位した 2 代目・曹丕の軍師としての役割を果たしたのが、後に魏を倒して晋を打ち立てた司馬懿仲達だ。しかして、本作の「馬陽の戦い」において趙の軍師李牧が立てた戦略、戦術とは？くり返しになるが、『キングダム～戦国の七雄』の趙編の解説では「長平の戦いで秦の白起に大敗。最後の名将・李朴も、王に疑われて死罪となり、趙は滅亡した。」と書かれているので、同作からのお勉強もしっかりと。

■□■2 日間に渡った「馬陽の戦い」の 1 日目の全貌は？■□■

東軍 vs 西軍が激突した 1600 年の関ヶ原の戦いは、小早川秀秋の裏切りによって一気に西軍が崩壊した。しかし、2 日間に渡る「馬陽の戦い」の 1 日目は次の通りだから、その展開は自分自身の目でしっかりと！

1 日目　趙軍 10 万と秦軍 8 万が直接ぶつかり合う激戦が繰り広げられた。
信は飛信隊を率いて趙右軍の本陣に近づき、その軍を率いる武将・馮忌を打ち取る。その結果、大将代理であった趙壮は全軍を後方の山間部へと後退させた。

第 3 作では、私はパンフレットにある次の「馬陽の戦い」開戦時の布陣を掲載した。



この布陣図の通り、趙軍 15 万の指揮を取る大将軍は趙壮だが、本来趙軍の総大将は趙壮ではなかった。第 3 作ではその謎が明らかにされないまま、王騎が“飛信隊”と名付けた信率いる 100 人隊が、ある“特殊任務”を果たしていく姿がクライマックスとして描かれていた。しかし、第 4 作では、そんな飛信隊の前に突如その存在が隠されていた龐煖の姿が登場するので、それに注目！

総大将たる龐煖が長い間姿を隠していたのは一体ナゼ？彼はどこで何をしていたの？人里離れた山里で武術の腕を磨き続け、今や自らを武神と名乗る龐煖の人間離れした強さを見れば、それが明らかになるので、それに注目！「馬陽の戦い」の 1 日目馮忌を打ち取った、信率いる飛信隊の前に突如現れた龐煖の強さは、信と羌瘣が 2 人で協力してぶつかっても全然通用しないほどだから、すごい。飛信隊の面々は、龐煖との戦いで血を吐いて倒れてしまった信を助けて、戦場から離脱するのが精一杯だ。すると 2 日目の戦いは？

■□■「馬陽の戦い」の２日目の全貌は？■□■

パンフレットによると、2 日目の戦いの全貌は次の通りだ。すなわち、

2 日目　①龐煖の偽物が蒙武を谷間に誘い込む
②趙荘軍が谷間に入り込んだ蒙武軍を包囲
③前線に出てきた王騎の前に龐煖が現れる
④突如現れた李牧軍第一陣が王騎軍を襲撃
⑤力業に出た王騎軍に李牧軍第二陣を投入
⑥龐煖と交戦中の王騎を弓で狙い撃つ

文字で読めばこの通りだが、このような丸 1 日にわたる大平原での大軍のぶつかり合いを、大スクリーン上で、かつ大音響の中で展開していくのを極上のシートに座って観るのは、まさに極楽！筋肉量をヤケに増大させた大沢たかおが演じる王騎が、武神と化した龐煖と互いに大矛を振るいながら一騎打ちを演じる姿は迫力十分だ。日本の時代劇の日本刀による名勝負も見応え十分だが、中国時代劇における矛と矛とのぶつかり合い、そして肉

と肉とのぶつかり合いも見応え十分だ。

もっとも、王騎と龐煖がこれほどまでに執念を燃やして“個人対決”に固執するのは一体なぜ？そんな疑問の中で登場してくるのが、第3作の「“紫夏”編」と同じような、本作の「“摎”編」だ。パンフレットを要約すれば、それは「王騎の父に育てられ、美しい女兵士として成長した王騎の側近・摎は幼い頃、王騎と「敵の城を100個とったら私を妻にしてください」と約束していた。やがて六大将軍の1人となり、馬陽で100個目の城をとるはずだった摎は、馬陽を陥落させた奏軍の前に突如現れた龐煖に敗れてしまう。他方、駆け付けた王騎は、戦場に横たわる摎の姿を見て激昂し、龐煖に激しく斬りかかり、その顔に大きな傷を刻みつけた」というものだ。龐煖はその場に倒れ込んだから、これにて一巻の終わり。誰もがそう思っていたが、実は一命を取り留めた龐煖は、山中にこもって修行を続けていたらしい。しかして、今回の馬陽の戦いで趙軍の作戦を立案した李牧は、修行に明け暮れていた龐煖を説得し、最も警戒すべき相手である王騎を確実に亡き者にするため、因縁深い龐煖を王騎と対峙させたというわけだ。

■□■大将軍の帰還とは？これは原泰久のオリジナル！■□■

「始皇帝（嬴政）モノは面白い」。それは「潜水艦モノは面白い」等と並ぶ私の持論だが、そこには史実に即したものとフィクションが入り混じっているので要注意だ。本作の「馬陽の戦い」や趙の龐煖や李牧なる人物の登場は史実に即しているものだし、秦の呂不韋の物語も史実に即しているものだが、原泰久がコミック『キングダム』の主人公として設定した「名もなき若者、信」と「天下の大将軍、王騎」は完全なフィクションだから、その区別をしっかりと。したがって、本作ラストのハイライトとして登場する「龐煖vs王騎」の大矛による一騎打ちがフィクションなら、王騎が龐煖の矛先の餌食になってしまうシーンもフィクションだ。

そんな『キングダム』シリーズの第4作（＝最終作）のサブタイトルが、なぜ「大将軍の帰還」とされているの？それを考えるについては、「帰還」の意味をしっかり押さえておく必要がある。帰還とは、「遠方から帰ってくること。特に、戦場などから基地・故郷などに帰ること。」（出典：デジタル大辞泉）であり、戦地などから無事に帰ってくる時などによく使われる。その類語は、「生還」（危険な状態をきりぬけて生きて帰ること）「帰郷」（故郷に帰ること）「帰省」（郷里に帰ること）「帰宅」（自分の家に帰ること）「帰着」（帰り着くこと）（すべて出典：デジタル大辞泉）等だ。したがって、遺体で家族の下に帰ってくることを、普通は「帰還」とは言わないはずだ。

「帰還」という言葉にそんな風にこだわる私には、本作のサブタイトルが『大将軍の帰還』とされていることが理解できなかったが、ネット上に「遺体が葬儀や告別式などの儀式を済ませた後、ご遺族のもとに戻ることを「帰還」と表現することがあります。ただし、この表現は敬意を込めたものであり、法的な専門用語ではありません。遺体が葬儀場や告別式場からご遺族のもとに戻る際、その具体的な表現は地域や文化によって異なる場合が

あります。」との情報を得ると、本作のラストにもなるほど、なるほど・・・。

大将軍・王騎が操っていた大矛は、後の三国志における関羽の青竜偃月刀（せいりゅうえんげつとう）、張飛の蛇矛（だぼう）、呂布の方天画戟（ほうてんがげき）と同じようにメチャ重いもので、英雄豪傑（の大男）しか操れず、スマートな若者の信には操ることはもとより、持つことだけでも大変な武器だ。しかし、“帰還”する大将軍・王騎から、彼の代名詞とも言うべき大矛を受け継いだ信は、その後この矛をどう扱うの？それが興味深いところだが、さて、『キングダム』シリーズの新たな章は、いつどんな形で再起動するのだろうか？

■□■本作は中国歴史 TV ドラマと対比すればさらに有意思！■□■

NHK の大河ドラマは、毎回 45 分で年間 40～45 回程度だが、毎回 60 分で全 50～70 話の中国の長編ドラマは、時代劇からファンタジー、ロマンスものまで、あらゆるジャンルが大量に作られている。2019 年に『ミーユエ 王朝を照らす月』を見て中国歴史ドラマにハマってしまった私は以降、キネマ旬報ムック『中国時代劇で学ぶ中国の歴史 特別版』を毎年購入し、時代劇を中心にレコーダーに録画して夕食時にいつも鑑賞している。私のお好みは、「胸キュンのロマンス時代劇」ではなく、本物の歴史ドラマだ。

NHK 大河ドラマも歴史ドラマが多いが、3000 年以上の歴史を持つ中国の歴史ドラマは、各王朝ごとに多種多様。その中で最も面白いのは、第 1 に三国志モノ、第 2 に秦の始皇帝モノだ。『ミーユエ 王朝を照らす月』は「始皇帝モノ」の 1 つだが、塚本青史の小説『バシレウス 呂不韋伝』（19 年）や、NHK で放映された『コウラン伝 始皇帝の母』（原題：皓鑭傳）（19 年）（全 62 話）と併せて鑑賞（勉強）すれば、始皇帝（＝嬴政）が生まれる以前の、春秋戦国時代（紀元前 770 年～紀元前 220 年）における、戦国七雄（燕、斎、魏、趙、楚、韓、秦）の状況がよくわかる。現在 BS11 で放映中の『始皇帝 天下統一』では、2024 年 7 月 23 日の第 27 話と 24 日の第 28 話で、龐煖が秦を倒すために 6 国の合従連衡を説いてまわるストーリーが描かれていたので、グッドタイミング！

始皇帝が中華統一を成し遂げることができた理由は色々あるが、その 1 つが人材活用術。秦は戦国七雄の中でも特に意識的にそれを重視していたため、他の六国から優秀な人材が次々と秦に流れてきたわけだ。その例が『大秦帝国』（原題：大秦帝国之裂変）（06 年）（全 51 話）の主人公である商鞅だが、本作にみる呂不韋も重要人物だ。中国語の「有意思」は翻訳すれば「面白い」の意味だが、本作は、中国歴史 TV ドラマと対比すればさらに有意思！

2024（令和 6）年 7 月 26 日記